

海外における『延喜式』の研究状況

『延喜式』の翻訳書を中心に

Overview of the Research on *Engishiki* Outside of Japan :
Focusing on Translations of *Engishiki*

YAMAGUCHI Eri

山口えり

はじめに

共同研究「古代の百科全書『延喜式』の多分野協働研究」は、日本古代史の研究に不可欠な文献である古代日本の法制書『延喜式』を「古代の百科全書」という観点から検討しなおし、文献史学の他に、分析科学・保存科学・薬学・食品学・考古学・技術史などの様々な分野と協働して、『延喜式』の情報を広く活用できる体制を作り上げることを目的としている。研究の達成目標としては、一つには、上記のような分野を越えた協働研究の場を設けることにより、古代の知識や技術を現代に活用すること、そして、もう一つには、海外も含めた、幅広い分野の研究者以外の人々にも、『延喜式』研究の成果を共有できるようなプラットフォームを作り出すことにある。

筆者は、本共同研究においては後者の目的を達成する研究組織の一員として、特に「海外も含めた」という観点より、『延喜式』の英訳の作成を担当している。理想的な目標としては『延喜式』の逐条的訳の作成が望ましい。だが、それに先だって『延喜式』そのものに関心を持ってもらい、海外を含めた幅広い分野の研究者が利用できるような環境作りが必要であろう。本稿では、その下準備として、海外、特に英語圏におけるこれまでの『延喜式』の研究状況について紹介することとしたい。

1 『延喜式』の翻訳者

近年、様々な分野で「国際的発信」という名のもと、歴史資料や用語の英訳が注目されてきている。実際には、文献の翻訳には近代以降の蓄積があり、日本古代の史料のうち、『日本書紀』・『古事記』・『万葉集』・『源氏物語』は、その代表的な例としてあげられよう。本共同研究でとりあげる『延喜式』は、これらとほぼ同時期の明治初期から英訳されている日本古代の文献である。『延喜式』には、現在、四つの翻訳が刊行されている⁽¹⁾。発表された順に翻訳者をあげると、①アーネスト・サトウ、②カール・フローレンツ、③ドナルド・フィリップ、④フェリシア・ボックの四名である。まずこの四名の略歴を確認し、『延喜式』翻訳の歴史的背景をたどることとしたい。

① アーネスト・サトウ Ernest Mason Satow (1843～1929)

アーネスト・サトウは、イギリスにおける日本学の基礎を築いた人物であるが、同時に、幕末から維新期に活躍したイギリス人の外交官であるという事実も忘れてはならない。サトウの活動は、自身の経験を著した『一外交官の見た明治維新』によって詳細が知られる⁽²⁾。

サトウ自身が、日本名を「佐藤（薩道）愛之助」と名乗ったことから、日系人ととらえられることもあるが、「サトウ」はスラブ系の姓である。サトウの父デーヴィッドは、スウェーデン、ドイツ、フランス、ロシアと国籍や住居を転々としていたが、イギリスに渡り、イギリス人であるサトウの母マーガレット・メイソンと結婚し、ロンドンに定住した。当時のイギリスでは階級差別が強く、中産階級の移民の子であるサトウの関心は自然とイギリス国内ではなく、海外に向けたものと想像される。

サトウの日本への関心は、イギリス人の外交官であるローレンス・オリファント Laurence Oliphant (1829～1888) が、日本に滞在したときの記録をまとめた『エルギン卿遣日使節録』を読んだことにある。サトウは、1861年の18歳の時に、イギリス外務省の領事部門へ通訳生として入省し、駐日公使ラザフォード・オールコックの進言によって清の北京で漢字学習に従事した。その後、1862年（文久二年）に、イギリスの駐日公使館の通訳生として横浜に着任した。来日当初は日本語の学習が十分ではなかったが、1863年からは公式文書の翻訳などの活動がみられるようになる。一般に日本語の習熟には年数がかかると言われているが、来日一年足らずで翻訳の業務に携わり、1865年（慶応元年）四月には通訳官に昇進したサトウの日本語運用能力はかなり優れていたことが、これらの経歴より明らかである。当時の日本においても幕府・長州藩ともに、日本語に堪能な英国人として知られたサトウは、その後、一時帰国を含め1883年まで、加えて1895年から1900年まで合わせて二十五年間、日本に滞在した。この間に外交官として活動しながら、日本研究者としても活躍した。現在も続く「日本アジア協会」の会報『*The Transactions of the Asiatic Society of Japan*』（日本語タイトルは『日本アジア協会会報』）に日本文化・神道に関わる研究論文を多く発表した。その中に本稿で検討の対象とする『延喜祝詞式』を翻訳し、解説したものがある。

日本アジア協会とは、明治維新から四年後の1872年に横浜で、日本に居住していた主にイギリス人とアメリカ人の外交官、実業家、宣教師が創設した学術団体である。日本についての知見を深めるための定期的な月例会と、会報『*The Transactions of the Asiatic Society of Japan*』の最低年一回の発行を行い日本学・日本研究の基礎を築いた。日本アジア協会では、サトウとほぼ同時期に、アストン⁽⁴⁾、チェンバレン⁽⁵⁾といった日本研究者が活躍しており、日本研究の最先端の学知がそろっていた団体であったと評価できる。

サトウ、アストン、チェンバレンは、十九世紀に始まったばかりの日本研究を牽引する三大イギリス人日本研究者として知られ、三名とも日本アジア協会で活動した。彼らの研究の題材となったものが、日本語や日本の文学・歴史であるため、見落とされがちではあるが、彼らは単なる人文学的好奇心で日本研究を行ったのではなく、特に外交官でもあったサトウやアストンには、これらの研究を通じて、神道という信仰と深く繋がる日本の国政や国民性を理解し、日本とイギリスがいかなる外交関係を築いていくべきかを検討するという課題も背負っていた。

サトウが『延喜式』の中でも、特に「祝詞式」のみを翻訳したのは上記のような背景があった。

『延喜式』は平安時代にまとめられた日本古代の法制書であるが、その中の巻一から十の神祇官関係の式である「神祇官式」は、神祇、いわゆる神道、日本の「神」への信仰に関わる内容が記載されている。

サトウのこの関心は様々なところから指摘できる。『*The Transactions of the Asiatic Society of Japan*』7号に掲載されたサトウの『延喜式』研究である“*Ancient Japanese Rituals Part 1*”は、次のように始まる。

One of the questions of most frequently asked by those who take interest in Japanese subjects is, “What is the nature of shintau?” (1) It might seem at first sight that the answer should be easy, but this is not the case. (2)

(下線と番号は、便宜上、筆者が付したものである。以下同じ。)

ここでサトウは、「神道とはなんぞや」という、下線部(1)の問いに対して、その答え下線部(2)にあるように「一見簡単そうに見えて、実はそうではない」とサトウは断言している。ここにサトウの『延喜式』研究の姿勢が神道の解明にあることが提示されていよう。

端的にそのことが示されるのは、サトウの『延喜式』という言葉そのものの英訳であろう。2012年にインターネットで発表された『延喜太政官式』の英訳作業の中では、『延喜式』は“*Protocols of Engi Era*”と題されている⁽⁶⁾。一方、サトウの場合、『延喜式』は“*Yengishiki*”とそのまま音で表記されるか、“*Ceremonial Law*”と訳されている。「儀礼・典礼・実施要項」といった意味を持つ“*protocol*”より、「儀礼上の・正式な」という意味を持つ“*ceremonial*”を使用している点で、サトウの『延喜式』のとらえ方が明確に表れている。

このような考えを持つサトウは、『延喜式』巻八に収められた「祝詞」に着目した。祝詞とは、神の徳を称え崇敬の意を表する内容を神に奏上して、加護や利益を得ようとする言葉である。サトウは祝詞を「*ritual*」と訳した。*ritual*とは「儀式」という意味である。つまり、サトウは祝詞自体が、儀式そのものを示したものであると考えていたのである。『延喜式』巻八の祝詞を分析することによって、サトウは日本人の古くからの神への信仰のあり方について研究し、日本人への理解を深めようと考えた。これらの事実はサトウの『延喜祝詞式』の研究を分析するには重要な観点となる。

② カール・フローレンツ Karl Florenz (1865～1939)

カール・フローレンツは、ドイツ人の文学研究者、言語学者である。1889年(明治二十二年)に来日し、明治中期から大正にかけて東京帝国大学でドイツ文学・ドイツ語を講義した。同時に『日本書紀』・『古事記』や日本の詩歌・戯曲などをドイツ語に翻訳し、1932年に「神代紀研究」で東京帝国大学より文学博士号をうけた。1914年(大正三年)に帰国後、ハンブルグ大学日本学講座教授に就任し、ドイツにおける日本研究の礎となった。

来日中にはドイツ東洋文化研究協会でも活躍した。ドイツ東洋文化研究協会は、サトウらが活動した日本アジア協会設立の一年後の1873年に、ドイツ人の商人や外交官が、日本についてもっと学び、日本におけるドイツの立場を強化する目的で設立した団体である。この団体は戦争による中

断を経て、現在まで存続し、ドイツ語圏日本学における重要な機関として認識されている。

フローレンツは、サトウらが活動した日本アジア協会の会報『*The Transactions of the Asiatic Society of Japan*』に『延喜祝詞式』の英文訳を公表しているが、このフローレンツによる『延喜祝詞式』の英訳は、PART 4と銘打たれ、PART1～3のサトウの翻訳研究を踏襲したものとなっている。

③ ドナルド・フィリップ *Donald L. Philippi (1930～1993)*

ドナルド・フィリップは、第二次世界大戦後に活動したアメリカ人の文学研究者である⁽⁷⁾。彼は、南カリフォルニア大学卒業後、一年間國學院大學に留学し、その間の研究成果として『延喜式』の中でも、やはり祝詞の翻訳を行い、出版している。詳しくは後述するが、サトウとフローレンツの『延喜祝詞式』の翻訳には、膨大な量の註釈が附され、それらの註釈は現在の日本学の研究水準にも劣らない質・内容のものが多くあるが、フィリップのものは基本的には祝詞の翻訳のみが載るものであった。こうした変化は、サトウやフローレンツの活動した時代とフィリップの活動した時代との要求が異なることに起因しよう。

④ フェリシア・ボック *Felicia G. Bock (1916～不明)*⁽⁸⁾

フェリシア・ボックは、アメリカ人の日本研究者である。バプテスト教会の宣教師 James Gressitt の娘であり、彼女は東京で生まれ育った後に、アメリカ最古の女子大学であるマウントホリヨーク大学 (Mount Holyoke College) でラテン語を学んだ。1937年に再来日し、神戸女学院大学で日本文学と日本史を学んだ。1940年に日本で Charles K. Bock と結婚後、1941年にはアメリカに帰国し、戦時中はニューヨーク市の戦略諜報局 (OSS) に勤務していたようである。戦後は日本研究の場に戻り、カリフォルニア大学バークレー校で、1948年に M. A. in Japanese, 1966年に Ph. D. in Oriental Language を取得している。

ボックも先述の三名と同様、『延喜式』に着目し、翻訳を行った。大きな違いは、他の三名の『延喜式』翻訳が『延喜祝詞式』に集中している中、ボックは、巻一から十の神祇官式全体と、後に、『延喜式』巻十六「陰陽寮式」、巻二十「大学寮式」の翻訳も行っていることである⁽⁹⁾。後の二式の翻訳は、ボックの関心が中国から伝わった学問が日本でどのように展開していったのかに向けられたことによる。サトウが『延喜式』の翻訳を行った幕末・明治のころの日本研究は、日本人の信仰・思考法を理解し、いかに日本という国家と向き合っていくかという観点に支配されていたが、個人の研究志向が翻訳対象に反映される時代となったことを示唆している。

以上、四名の『延喜式』の翻訳を行った研究者を紹介してきた。欧米における『延喜式』研究は、『日本書紀』や『古事記』といった古代の代表的な文献と同時期の明治初期には始まり、註釈および翻訳作業が行われていた。また、サトウが『延喜式』研究を始めた段階では、現在よく着目される『延喜式』の法制史料という側面ではなく、日本人の神への信仰、日本文化の理解を目的とした『延喜式』研究であったということを確認した。

2 英訳『延喜式』の内容

次に、それぞれの英訳『延喜式』の内容と各々の特徴についてみていきたい。ここでも前節に従い、翻訳順に見ていくこととする。

① サトウ訳

サトウの『延喜式』の祝詞の翻訳は三つに分かれている。いずれも『*The Transactions of the Asiatic Society of Japan*』（『日本アジア協会会報』）に寄せられたものであり、1879年に会報7号に掲載された“*Ancient Japanese Rituals Part 1*”，同じ会報7号に掲載された“*Ancient Japanese Rituals Part 2*”，1881年の会報9号に掲載された“*Ancient Japanese Rituals Part 3*”である。

まず“*Ancient Japanese Rituals Part 1*”では、サトウの『延喜式』研究全体の序文が載る。序文では『延喜式』の祝詞を研究する意義を解説し、参照した日本語の文献を紹介し、『延喜式』の成立事情についてまとめ、神祇に関わる巻一～十の各巻の説明を付し、巻八に収録された二十七編の祝詞のタイトルを提示する。

本論では、まず『延喜式』巻八の祈年祭の説明を行い、祈年祭の祝詞の翻訳と膨大な量の註釈を付す。サトウは祈年祭の祝詞の註釈にあたり、月次祭や貞観儀式、賀茂真淵『祝詞考』などを使用している。

サトウの祝詞の翻訳を確認したい。例として祈年祭祝詞式の冒頭⁽¹⁰⁾の読み下し文とサトウの祈年祭祝詞の英訳を次に掲げる。

集り侍る神主・祝部等諸聞き食へよと宣ふ
 高天原に神留り坐す皇睦神漏伎命・神漏彌命を以て天つ社國つ社と稱へ辭竟へ奉る
 皇神等の前に白く
 今年の二月に御年初め賜むとして皇御孫命の宇豆の幣帛を朝日の豊逆登りに稱へ辭
 竟へ奉くと宣ふ

He says: “Hear all of you, assembled kannushi and hauri.”

He says: “I declare in the presence of the sovran gods, whose praises by the **WORD** of the sovran’s dear progenitors’s augustness and progenitrix, who divinely remain in the plain of heaven, are fulfilled as heavenly temples and country temples. I fulfil your praises *by setting-up* the great **OFFERINGS** of the sovran **GRANDCHILD’S** augustness, *made* with the intention of deigning to begin the **HARVEST** in the second month of this year, as the morning-sun rises in glory.

読み下し文の祝詞と英訳された祝詞を見てすぐ判明することは、サトウの翻訳は、基本的に逐語訳されており、ごまかしくないことである。また、文中には大文字表記になっている単語や斜体で記載された単語が見えることである。

これについては、サトウ自ら翻訳に当たって注意したこととして以下のようなことを述べている。⁽¹¹⁾

In the following translation I have endeavoured to be as literal as possible; that is to say, to use English words which exactly express in their original and etymological meaning the sense in Japanese. I have also been careful to use the same English equivalents for the same Japanese words wherever they occur. (1) Word in italics have been supplied in order to complete the meaning.
(2)

下線部(1)には、祝詞に使われている言葉の持つ根源的な(original)語源的(etymological)な意味を適切に示す英単語を用いて訳すことや、同じ単語には同じ訳語を使うようにしているという、サトウの翻訳の基本スタンスが示されている。下線部(2)では、斜体で表した単語は、翻訳する上でどうしても補わないと英訳できなかった部分であることを述べている。大文字表記の単語については注が付されているが、その意図については、以下で確認していきたい。

WORD は、一般的な英和辞典、例えば『プログレッシブ英和中辞典』では「言葉」を意味する。しかし、ここでは祝詞の「称辞」を指し、単なる言葉ではないことを大文字で示す。

OFFERINGS は、祝詞の中の「宇豆の幣帛」を指す。「宇豆」とは立派なという意味の古語であるが、単なる offering(貢ぎ物)ではないことを大文字表記することによって示す。

GRANDCHILD は、「皇御孫命」を指し、やはり、単なる「孫」ではないことを示す。

同様に、**HARVEST** は祝詞の「御年」を指し、単なる収穫物ではないことを示す。

つまり、翻訳に大文字のみで綴られる単語は、神の荘厳さを示す用語に使用するというサトウの翻訳ルールが見て取れるのである。

“Ancient Japanese Rituals Part 2”についても見ていく。ここでは、前稿 Part 1 の祈年祭祝詞に続いて、同じく巻八所収の春日祭、広瀬大忌祭、龍田風神祭の祝詞の註釈と翻訳が載る。特に春日祭については詳細な解説もつき、そのみで一つのまとまった論考といえる。

サトウによる『延喜祝詞式』の翻訳の最後となる1881年に発表された“Ancient Japanese Rituals Part 3”についてもその内容を確認したい。本稿では、風神祭に続く、巻八所収の平野祭、久度古関、六月月次祭、大殿祭、御門祭の祝詞の翻訳と註釈が載る。基本的には、これまで同様、各祝詞には丁寧な註釈が付されるが、久度古関は平野祭と、月次祭は祈年祭の祝詞との相違点のみがあげられる。註釈としては十分なものと感じられる。

“Ancient Japanese Rituals” Part 1, Part 2, Part 3 を通読すると、サトウの『延喜式』祝詞の翻訳は、いずれも単なる英訳ではなく、註釈部分のみを取り上げても非常にハイレベルであると判断できる。外交官としての勤務をこなしながら、祝詞の翻訳研究を行い、短期間で“Ancient Japanese Rituals” Part 1, 2, 3 を上梓したことは敬服する。

一方で、現在の研究水準からすると、誤解があったことも事実である。例として、大忌祭の祝詞をあげる。まずは大忌祭の祝詞をあげ、次にサトウの解説を見ていきたい。

広瀬の大忌の祭

広瀬の川合かわいに称たたえ辞こと竟おえ奉すめがみる皇神みなの御名もうを白みけもさく、御膳わかうか持ちする若宇加めの壳みことの命と御名もうをば白すめみまして、この皇神すめみまの前に辞すめみま竟すめみまえ奉すめみまらく、皇御孫すめみまの命の宇豆すめみまの幣帛すめみまを捧おほきげ持おほきたしめて、王おほきたち臣まえつきみたちを使まとして、称すめがみえ辞こと竟おえ奉すめがみらくを、神主かみ・祝部いわら諸聞もろき食くえよと宣のたまう。

奉たてまつる宇豆うまの幣帛ひしは、御服みわは明妙あかるたえ・照妙てるたえ・和妙にぎたえ・荒妙あらたえ、五色いくさの物は楯たて・戈こ・御馬みま、御酒みは甌わのへ高知たかり、甌わの腹満はらみて双ふたべて、和稻にぎね・荒稻あらしねに、山やまに住すむ物ものは、毛けの和にき物もの・毛けの荒あき物もの、大野おほのの原はらに生なる物ものは、甘菜あまな・辛菜からな、青海原あまのに住すむ物ものは、鱈たらの広ひろき物もの・鱈たらの狭せまき物もの、奥おくつ藻葉もは・辺へつ藻葉もはに至いたるまで、置たてまつき足たらわして奉たてまつらくと、皇神かみの前に白しろし賜たまえと宣のたまう。

かく奉たてまつる宇豆うまの幣帛ひしを、安幣帛やすの足た幣帛たと、皇神かみの御心みこに平なげく安やすらけく聞きこし食くして、皇御孫かみの命みことの長御膳ながみの遠御膳とほみと、赤丹あかの穂ほに聞きこし食くし、皇神かみの御刀代みを始はめて、親王みたち・王みたち・臣こたち・天あまの下の公民おみの取とり作つくる奥おくつ御歳みとしは、手たぬじみに水沫みな画かき垂たり、向股むかに泥画ひじき寄よせて取とり作つくらむ奥おくつ御歳みとしを、八束やつか穂ほに皇神かみの成なし幸さいわえ賜たまわば、初穂はつほをば汁じゆにも穎いねにも、千稻ちね・八千稻やちねに引ひき据すえて、横山よこやまの如ごとく打うち積たみ置おきて、秋あきの祭まつりに奉たてまつらむと、皇神かみの前に白しろし賜たまえと宣のたまう。

倭やまとの国くにの六むつの御県みあがた、乃また、山口やまぐちに坐すす皇神かみたちの前まへにも、皇御孫かみの命みことの宇豆うまの幣帛ひしを、明妙あかるたえ・照妙てるたえ・和妙にぎたえ・荒妙あらたえ、五色いくさの物は楯たて・戈こに至いたるまで奉たてまつる。

かく奉たてまつらば、皇神かみたちの敷しき坐すす山々やまの口くちより、さくなだりに下くだし賜たまう水みづを、甘あまき水みづと受うけて、天あまの下の公民おみの取とり作つくれる奥おくつ御歳みとしを、悪あくしき風かぜ・荒あき水みづに相あわせ賜たまわず、汝命なむの成なし幸さいわえ賜たまわば、初穂はつほをば汁じゆにも穎いねにも、甌わのへ高知たかり、甌わの腹満はらみて双ふたべて、横山よこやまの如ごとく打うち積たみ置おきて奉たてまつらむと、王みたち・臣こたち・百ももの官かみの人ひとども、倭やまとの国くにの六むつの御県みあがたの刀禰やなぎ、男おとこ女めに至いたるまで、今年ことしの某あの月つきの某あの日ひ、諸もろ参出まゐりて来きて、皇神かみの前まへにうじ物うね類ね根ね築たき抜ぬきて、朝日あさひの豊逆ゆたか登のぼりに称すめがみえ辞こと竟おえ奉すめがみらくを、神主かみ・祝部いわら諸聞もろき食くえよ」と宣のたまう。

この祝詞(12)について、サトウは次のように述のたまべる。

The text of this Ritual is probably corrupt, at least the latter portion of it. (1) The phrase “Sovran gods who dwell in the mountains of the six FARMS of Yamato” is nonsense, for the six FARMS were not situated in the same localities as the temples of the entrances to the mountains, as can be seen from the passages in the ‘Praying for Harvest’, where their worship is spoken of. The gods of the ‘entrances to the mountains’ were worshipped for the sake of the timber which grew under their care, and had nothing to do with the supply of water, for which the ‘gods who dwell in the partings of the waters’ are worshipped. (2) Nor is it consonant with the functions of either the Farm or Forest gods that they should be besought “not to inflict bad winds and rough waters.” It was natural enough in worshipping the goddess of food to offer up prayers also to the gods of the farms where the rice was to be grown under her protection, and likewise to the gods of the water, without whose aid irrigation of the growing rice was impossible, and as the goddess of food was at the same time the goddess of trees, we can perhaps see how the worship of the forest gods may have come to be conjoined by mistake with hers. Motowori thinks

that the original *norito* of this extremely ancient service must have been lost, and replaced it with one composed by ignorant priests, (3) who borrowed a piece from the Praying for Harvest and a phrase or two from the service of the gods of wind (i.e. about bad winds and rough waters), and mixed the Farms, Forests and Waters together in one petition.

サトウは、広瀬大忌祭の後半部分、つまり、倭の国の六御県と山口坐皇神に関わる部分は corrupt (原形が損なわれている)と冒頭の下線部(1)で指摘する。下線部(1)以降で、サトウは、その理由について述べており、その趣旨は次のようにまとめられる。サトウは、「山口坐皇神」は木材の伐採の神であり、「水分神」の担当する水とは関わらないと判断している(下線部(2))。しかし、水が山々からもたらされることは祝詞にもかかれており(祝詞の二重下線部)、山と水との関係性についての日本人の感覚を十分とらえきれていない節があると考えられる。

もちろんサトウは自身の説を述べるだけでなく、他の文献からも周到に自説の裏付けをとっている。サトウの場合、その判断の大きな根拠となっているのが本居宣長の説である。下線部(3)にみられるように、本居の説を引用し、⁽¹³⁾ 広瀬大忌祭の祝詞には、後世に誤って手が加えられていると述べている。この一例にも顕著なように、サトウの場合、本居への傾倒が非常に強く認められる。しかしながら、この見解は今の『延喜式』の祝詞研究とは異なる。

上記で示したような注意すべき点はあるが、サトウの祝詞の研究は賀茂真淵をはじめ多くのサトウに先立つ祝詞研究の解釈に目を通した上で行われている。イギリス人の感想ではなく、これまでの研究の蓄積を重視した上での日本研究として無視できないものにとらえられる。また、近年では、神社 = shrine, 寺院 = temple と訳するのが通例となっているが、サトウは神社を temple と訳している。当時における寺社の認識について、サトウと日本人とで異なる主張があったのか、今後の検討すべき問題の一つと考える。⁽¹⁵⁾

② フローレンツ訳

次に、フローレンツの訳した『延喜式』祝詞の特徴について見ていきたい。前節でも指摘したように、フローレンツの『延喜祝詞式』の英文訳は、サトウの行った祝詞の翻訳作業の継続を強く意識しており、論文名も“*Ancient Japanese Rituals Part 4*”と題している。この中で、フローレンツが翻訳・研究の対象としたのは、サトウが“*Ancient Japanese Rituals Part 3*”で、祈年祭の祝詞との差異を指摘したにとどまった六月晦大祓の祝詞である。翻訳の方法、解釈の付し方など、スタイル(論文の形式)においてもサトウのものと違わない。このようなフローレンツの立ち位置については、論文の序文にていねいに記載があるのでその該当部分を以下に掲げる。⁽¹⁶⁾

In volumes VII and IX of the Transactions of the Asiatic Society of Japan, *Sir Ernest Satow* has published an English translation, with commentary, of the NORITO, or Ancient Japanese Rituals. His three papers on this subject constitute one of monumental works of Japanese philology. (1) Unfortunately the learned author has not seen his way to give us more than the smaller moiety of the Rituals (nine out of twenty eight) which is more regrettable (2) as no abler hand could have

undertaken the task. It is difficult for anybody, and rather bold, to continue a work begun by a Satow, for the inferiority of the continuation will be only too palpable. As the Norito, belong, however to the most important, interesting and beautiful products of Japanese literature, (3) and the present writer has therefore ventured to come forward and supply the omission.

ここで注目したいのは、二点である。一つは、下線部 (2) にあるように、フローレンツがサトウの業績を高く評価し、サトウの祝詞研究の継続の必要性をうたっていることである。もう一点は、下線部 (3) にあるように、フローレンツが祝詞を “the most important, interesting and beautiful products of Japanese literature” と日本文学における非常に重要で、興味深く、そして気品ある作品であると、祝詞そのものの文学価値を評価している点である。フローレンツは、祝詞を “one of monumental works of Japanese philology” (下線部 (1)) と「日本文献学の不朽の名作」として評価し、フローレンツは、だからこそ信頼のおける祝詞の翻訳の必要性は高いと述べている。サトウにとって祝詞研究は、日本人理解・日本人の神認識の理解のための、一種の道具のような面があったが、フローレンツは日本人理解の側面より、日本文学の研究の対象として祝詞を受けとめているところに二人の違いが見られる。もちろんその違いは、サトウが外交官であり、フローレンツが文学研究者であるという立ち位置に大きく因るものであろうが、フローレンツの翻訳・研究からは、欧米人による祝詞の研究姿勢への変化がうかがえる。

フローレンツは序文の後に、参考文献をあげる⁽¹⁷⁾。

LITERATURE USED: Besides the older commentaries of Mabuchi, Motowori Norinaga and Fujiwara, mentioned by Satow, vol. IV pag.101, (1) I have made use of the Noritoshiki-kogi (祝詞式講義) by Haruyama Tanomu, the Norito-benmo (祝詞弁蒙) by Shikida Toshiharu (5 vols), the Norito-shiki-kogi by Okubo (2 vols), the Norito-ryakkai (祝詞略解) by Kubo (6 vols), and notes of lectures delivered by Motowori Toyokahi in the Imperial University of Tokyo. The big commentary Noritokogi written by the late Suzuki Shigetane in 34 vols. (1) is unfortunately, like his huge commentary on the Nihongi (2) not yet accessible to the general public. The government would render an invaluable service to all students of Japanese archaeology by printing these two works of the greatest scholars Japan ever possessed. (3) I have also had the advantage of consulting a very interesting paper on the Oh-harae by Dr. H. Weipert (Trans. of the German As. Soc., Heft 58, page 365-375), in which special attention has been paid to the ritual as being a monument of the most ancient judicial ideas of the Japanese, and the learned essay, “The Mythology and Religious Worship of the Ancient Japanese” by Satow, published in the Westminster Review, July 1898, p.27-57. (2) (Unfortunately this latter paper became known to me through the kindness of its author, only after the present essay was finished, so that the valuable information given by it could only be made use of in the form of additional notes)

フローレンツは、やはりここでもサトウのあげた参考文献を尊重し（冒頭の波線部 (1) 参照）

また、サトウ個人からの学術援助があったことを明かしている（波線部(2)参照）。

フローレンツは他に、サトウの研究後に発表された、春山頼母『祝詞式講義』、敷田年治『祝詞弁蒙』、大久保初雄『祝詞式講義』、久保季茲『祝詞略解』も参考としている。加えて、本居豊穎の東京帝国大学での講義ノートも入手している（いずれも二重下線部）。そして、フローレンツが特に高く評価するのが、鈴木重胤による二つの著作、『延喜式祝詞講義』（下線部(1)）と『日本書紀伝』（下線部(2)）である。フローレンツは当時は一般に公開されていなかったこの二研究書の出版を政府に強く求め、鈴木重胤を the greatest scholars Japan ever possessed と日本史上最も偉大な研究者と称えている（下線部(3)）。ここにも本居に深く傾倒していたサトウとの違いがみられる。

フローレンツは、ドイツ公使館の書記官であった Weipert の「大祓」という論文にも目を通して（点線部参照）。Weipert は祝詞を古代日本の司法に関わる思考法を示したものとしてとらえた研究を行っている。文学者であるフローレンツにとっても政治と宗教は簡単に切り離されるものではないという認識があったのであろう。

このような序論と参考文献の紹介の後に、六月晦大祓の翻訳と註釈による本編が続く。本論文には、挿絵も含まれ、ビジュアル的な理解の促進も図られている。

③ フィリッピ訳

フィリッピ訳は第二次世界大戦後ということもあり、サトウにみられた日本人理解や日本人の宗教観の理解という目的より、むしろ、フローレンツのように祝詞の文学的側面を重視したものとなっているが、さらに、文学的価値そのものよりも、古代の日本語研究の一環として、祝詞の文法的・修辭的特徴の解明に重点が置かれている。サトウやフローレンツのような詳細な註釈や歴史的背景の説明はなく、祝詞の翻訳以外には祝詞のごく簡単な紹介と用語集が付されるのみである。

ここでも著者の研究姿勢が如実に表れる序文から、みていきたい。フィリッピの著書“*Norito: A New Translation of the Ancient Japanese Ritual Prayers*”の序文には次のようにみえる。

The extant literature (1) of ancient Japanese prayers is somewhat limited in quantity and scope, being confined to the 27 official rituals found in volume 8 of the Engi-shiki, the compilation of laws and minute legal regulations (2) of 927AD and a few other similar formulas recorded in other ancient documents.

冒頭の文章より、祝詞は日本古代の数少ない文学作品、extant literature (下線部(1))であるとフィリッピが受けとめていたことが明らかである。もちろんフィリッピも、残存する数少ない祝詞は『延喜式』という法制資料の一部であるということは認識していた（下線部(2)）が、フィリッピはその点については重視する必要性は感じていなかったようである。そのことは上の序文の文章からもうかがえるが、加えて、フィリッピが他の三名と異なり、『延喜式』巻八以外の古代の史料から、五つの祝詞を「古代祝詞」(Ancient Japanese Ritual Prayers)として、同列に翻訳していることから、古代に作られた祝詞に残された古代の日本語に関心があったことが知られる。なお、フィリッピは祝詞を「Ritual Prayers」と訳しており、「儀礼での祈りの言葉」と神に祈る言葉と受けとめて

いたことも題名から判明する。

フィリッピが古代祝詞として、追加した五つの祝詞は次のものである。

一つは、中臣寿詞である。これは藤原頼長(1120~1156)による『台記別記』の弘治元年(1142)十一月十六日の条に記載されたもので、踐祚大嘗祭の時に中臣氏が奏上した寿詞である。『延喜式』には見えないが、重要な古代の祝詞と評価される。

二つ目は、室寿という、新築した家屋を寿ぐことばである。これは、『日本書紀』顕宗天皇即位前紀にみられる。身分を隠して縮見屯倉首に仕えていた弘計王(後の顕宗天皇)が首の新築祝いの場で見事な新室寿ぎの寿詞を唱え、歌で身分を明かしたとされるものである。

三つ目は、櫛八玉神の火鑽の詞で、『古事記』神代記にみえる上古の祝詞とされる。大国主命の神話に、大国主命の請い給うままに出雲の多芸志の小浜に神殿を営んで、水戸神の孫の櫛八玉神が膳夫となって、天の御饗を奉る時に申しあげたことばが祝詞として翻訳されている。

四つ目、神祖尊の詞という、『常陸国風土記』の筑波郡の条にある伝説を元にしたものである。訪ねてきた神祖尊の宿泊を富士山は新嘗の諱忌を理由に断ったのに対し、筑波山は歓待したため、神祖尊が飲んで発した詞である。

最後の五つ目は、五十迹手の言で、『日本書紀』仲哀天皇八年条にみられる。筑紫の伊観県主の祖である五十迹手が仲哀天皇を穴門の引嶋に迎えた時に奏上したことばが祝詞としてあげられる。

フィリッピにとって、祝詞とは『延喜祝詞式』に限らず、一般的な国語辞典に表される通り、神徳を称え、崇敬の意を表する内容を神に奏上し、もって加護や利益を得ようとする言葉であった。祝詞の翻訳に当たり、フィリッピが何を重視したのかについて、彼は序文において、次のように指摘する。

The rituals are cast in antique language of the most flowery sort. (1) Sentences are long and loosely-connected; (2) the grammatical relationship of parts is difficult to determine; (3) the meaning of many words is unclear; (4) and everywhere semantic clarity is sacrificed to sonority. (5) Some of the frequent techniques are: repition, parallelism, long enumerations of names of deities and offerings, metaphors, the use of mythological accounts to explain the origin of certain forms of worship, and the all-pervading sonority.

フィリッピは、祝詞の特徴を上のように述べている。

- (1) 祝詞は古語の中でも、最も華麗な文体で書かれている(下線部(1))
- (2) 祝詞の一文は長く、ゆるやかにつながっている(下線部(2))
- (3) 文法上の掛かり方が難しい(下線部(3))
- (4) 多くの言葉の意味はとりにくい(下線部(4))
- (5) 何を言いたいのかは重視されていない(下線部(5))

これらのフィリッピの意見については、筆者も同意するところである。

加えて、フィリッピは、祝詞でよく使われる文章技法についても、波線部で述べている。祝詞では、表現の繰り返し、対句、神名や奉納物が延々と列挙されること、比喩、信仰の起源を説明する

ために神々に行った取り引きのような説話がでてくること、祝詞全体を通じて存在する音声的な効果があることを指摘している。確かに、祝詞を通読していくと、対句表現の繰り返しや神名や供物の名称は多く見え、なぜその神を信仰し、祭祀を行うのかという理由も祝詞で述べられる。一番最後にある「all-pervading sonority」（直訳すると、全体に通じて鳴り響くこと）とは、祝詞の響きの重厚さを指していると筆者は理解しているが、祝詞を読み上げたときに感じる、ある一定の重厚なリズムも確かに認められよう。

このようにフィリピの関心は、祝詞の歴史的背景、つまり日本人の特性や日本の宗教の解明ではなく、祝詞の持つ詩的なリズムに重きがあったことが知られる。その志向はフィリピの祝詞の翻訳にも端的に表れている。例として祈年祭祝詞の冒頭をあげる。先にあげたサトウのものと同じ箇所をあげる。

Hear me, all of you assembled *kamu-nusi* and *hafuri*, Thus I speak,

The *kamu-nusi* and *hafuri* together respond: 'oo'.

The same below whenever "Thus I speak" occurs.

I humbly speak before you,

The Sovereign Deities whose praises are fulfilled as

Heavenly Shrines and Earthly Shrines

By the command of the Sovereign Ancestral Gods and Goddesses

Who divinely remain in the High Heavenly Plain;

This year, in the second month,

Just as grain cultivation is about to begin,

I present the noble offerings of the Sovereign Grandchild

And as the morning sun rises in effulgent glory,

Fulfill your praises, Thus I speak.

改行また各行の文頭は、フィリピの翻訳書に従った。フィリピが祝詞の切れ目やリズム感を視覚的にも意識していたことが伝わる表記となっている。先に示したサトウのものとは見た目にも違う。読み上げたときには、自然とリズムカルに読みたくなるような工夫がなされている。

④ ボック

最後に、ボックによる『延喜式』祝詞の翻訳を確認していきたい。ボックは、前の三人と異なり、『延喜神祇官式』全ての翻訳を行っている。その成果は二冊に分かれて、“*Engishiki: Procedures of the Engi era. Books I-V*” (1970) と “*Engishiki: Procedures of the Engi era. Books VI-X*” (1972) で公表されている。それぞれの章立ては次の通りである。

Books I–V

Chapter One: Development of Law in Japan

A The Beginnings of Written Law

B *Kyaku* and *Shiki*

C Text of *Engishiki*

Chapter Two: The *Jingikan*

Chapter Three: The Cult of the Sun-Goddess

Chapter Four: Introduction to the Translation

A The Language of the *Engi-shiki*

B *Engi-shiki* Book I

C *Engi-shiki* Book II

D *Engi-shiki* Book III

E *Engi-shiki* Book IV

F *Engi-shiki* Book V

G Conclusions

ENGI-SHIKI, BOOK ONE: Festivals of the Four Seasons (Part I) (四時祭式上)

A Festivals of the Second Month

B Festivals of the Fourth Month

C Festivals of the Sixth Month (repeated in the Twelfth Month)

ENGI-SHIKI, BOOK TWO: Festivals of the Four Seasons (Part II) (四時祭式下)

A Festivals of the Ninth Month

B Festivals of the Eleventh Month

C Festivals of the Twelfth Month

ENGI-SHIKI, BOOK THREE: Extraordinary Festivals (臨時祭式)

ENGI-SHIKI, BOOK FOUR: The Shrine of the Great Deity in Ise (伊勢大神宮式)

ENGI-SHIKI, BOOK FIVE: Bureau of the Consecrated Imperial Princess (齋宮式)

(ENGI-SHIKI, BOOK ONE 以降は、翻訳と註釈。)

巻末に、付録として、畿内七道の地図、歴代齋宮表、十二支の時刻表、尺貫・町段歩の度量衡の表を付す。

Books VI–X

Chapter One: Introduction to Book Six

ENGI-SHIKI, BOOK SIX: Procedures for the *Saiin-shiki*

Chapter Two: Introduction to Book Seven

ENGI-SHIKI, BOOK SEVEN: *Senso Daijo-sai*

Chapter Three: Introduction to Book Eight

ENGI-SHIKI, BOOK EIGHT: The *Norito*, or Rituals

Chapter Four: Introduction to Book Nine and Ten

ENGI-SHIKI, BOOK NINE: Register of Deities (A)

ENGI-SHIK, BOOK TEN: Register of Deities (B)

(各巻の紹介に続き、式文の翻訳と解説。)

巻末に、*Books I-V*と同じ、畿内七道の地図、歴代斎宮表、十二支の時刻表、尺貫・町段歩の度量衡の表を付す。加えて、付録として「賀茂斎院の一覧表」と「巻九・十所収の神社数の地域的分布の表」がのる。

両書ともに二百ページを超える大著である。特に前著の方は延喜式条文の翻訳に先立ち、第一章「日本における法制度の展開⁽¹⁸⁾」では、「成文法の始まり」、「格と式」、「延喜式の写本」の三節、第二章「神祇官」、第三章「天照大神の祭儀」という『延喜式』を研究するための基本知識、神祇官式を研究するための神祇官と天照大神の基本知識が述べられている。こうした章立てから、ボックの『延喜式』研究の姿勢は、これまでのサトウ、フローレンツ、フィリッピのものとは、また異なり、よりいわゆる歴史学的なアプローチに近いことが判明する。

ボックが、なぜ『延喜式』の中でも神祇官式にこだわって翻訳したのかを述べる箇所が著書の序文にあるので確認したい。

There are 50 books (*kan*) in the *Engi-shiki*. The portion which is most readable and has most relevance today is the first ten books of procedures (*shiki*) for carrying out the *jingi-ryo*, the laws concerning the native religion. (1) In order to understand the administrative structure which supervised this native-or kami-religion, Chapter Two of this study is devoted to the *Jingi-kan*, the department of kami affairs, its staff and its functions. (2)

下線部(1)でのボックの主張によれば、『延喜式』の中で、神祇令を施行していくための式である『延喜式』の冒頭の十巻(いわゆる神祇官式)は、最も読みやすく、⁽¹⁹⁾現在との関連が深いものである。これについては筆者は意見を異にするが、ボックは下線部(2)では、日本固有の神信仰(native-or kami-religion)に関わる行政手続きがどのように行われていたのかを理解するためには、神祇官の構造と機能について知ることが重要であったと認識しており、こうした学問上の姿勢については頷首する。

ボックは、延喜太政官式の翻訳の十三年後には“*Classical Learning and Taoist Practices in Early Japan, With a Translation of Books XVI and XX of the Engi-Shiki*” (1985)を公表する。本書についても章立てを紹介したい。

Part1 Classical Learning and Taoist Practices in Early Japan

Chapter 1 The Beginning

Chapter 2 The Ying-yang Bureau (陰陽寮)

Chapter 3 The Bureau of Higher Learning (大学寮)

Part 2 The Translation

Chapter 4 Book XVI of Engishiki (陰陽寮)

Chapter 5 Book XX of Engishiki (大学寮)

付録：用語解説集，十二支の時刻表，日本における暦の変遷表，干支表，度量衡表

本書でも神祇官式に関わる前著のように陰陽寮と大学寮の翻訳を第二部で行うにあたり，第一部「古代日本における中国漢籍の受容と道教のあり方 (Classical Learning and Taoist Practices in Early Japan)」と題して，第一章で「漢籍の受容 (The Beginning)」，第二章で「陰陽寮」，第三章で「大学寮」についての基本的な情報を整理し，概略をまとめた。ここでは，ボックの関心が神祇信仰から，中国より伝来してきた学問が日本でどのように展開していき，どのような行政手続きがとられていたのかを『延喜式』の条文から探ることに変わっているが，このような研究スタイルは，やはり今の日本古代史研究のオーソドックスな手法に近いといえよう。

そういった観点からは，ボックの三著作はいずれも多く参考文献が載せられ，単なる翻訳書ではなく，註釈も含め研究書ともいえる内容である。細かい点については誤りも見受けられるが⁽²⁰⁾，欧米圏における『延喜式』の研究書としては無視できないものであろう⁽²¹⁾。

ボックの『延喜式』訳の特徴を確認していきたい。やはりサトウとフィリッピと同様に祈年祭祀詞の冒頭をあげたい。

Oh ye assembled shrine chiefs and all ye priests, hearken unto what we say. (Shrine chiefs and all priests are to respond 'Ooh!' to this and to all succeeding pronouncements.)

Before the mighty ancestral gods and goddesses who augustly reside in the Plain of High Heaven, before the many *kami* enshrined in heaven and earth, we raise our word of praises; and to the mighty *kami* we make bold to say: In this second month of this year, at the beginning of the sowing of seed, with choice offerings from the divine descendant at this moment of the majestic and brilliant dawning of the morning light, we humbly raise our words of praise.

一見して明らかなのは，フィリッピのように改行を細かく使わず，詩的なリズムを重視していない点である。また，サトウのように，特に神の荘厳さを示す用語を大文字のみで綴るといったような，神の存在を殊更に際立たせるような方法もとっていない。どちらかと言えば，意味のとりやすさを重視して，難しい言葉は基本的に使わず，簡明な訳になっているといえよう。フィリッピの訳が叙情的であるのに対し，ボックのものは学術的であると評価する向きもある⁽²²⁾。

サトウ，フィリッピ，ボックの英訳の特徴がわかりやすく出ている例として，「皇陸神漏伎命・神漏彌命」の訳をみていきたい。

サトウ：sovrans' dear progenitors augustness and progenitrix

フィリッピ：Sovereign Ancestral Gods and Goddesses

ボック：mighty ancestral gods and goddesses

サトウの訳は、基本的には一字一句省かない直訳的な英訳であるが、ここでも「陸」の部分で「dear」と訳出したと思われるように、ていねいに訳している。また、祝詞からうかがえる神の偉大さ、荘厳さ、希少さを示すため、*sovrán* (*sovereign* の古風な今では使わなかつづり方)、*progenitor* (創始者)、*progenitrix* (女性の創始者) というように通常ではあまり目にすることのない用語を用いている。

フィリッピは、*Sovereign* (至高の) *Ancestral Gods and Goddesses* (先祖神) と訳出し、頭文字を大文字にし読むときに、何らかのアクセント、強調がなされるように工夫をしている。

一方で、ボックはよりわかりやすく *mighty* というアメリカの幼稚園児であれば理解できるような「力強い」という言葉を使う。

いずれもその可否はともかく、主眼がどこに置かれるかで訳し方が変わってくることを理解する必要がある。

三者の訳の特徴は、祝詞の話し手を英訳のどこにどのようにもってくるかという点にも表れる。例えば、「聞こし食せと宣る」の主語の位置付けを参考としてあげたい。

サトウ：He says ではじまる

フィリッピ：Hear me の始まりと Thus I speak の文言がある。

ボック：we

誰が誰に向かって発言しているのか、日本語のあいまいさを避け、最もはっきりとさせたのがサトウの訳に対して、ボックは「we」を用い、日本語のあいまいさをそのまま表現したとも受けとめられる。

同様に、祝詞の文末表現「称辞、竟へまつらくと宣る」をどこにおいて訳すのかについても三者で判断が分かれる。サトウが「He says」と簡潔すぎるとも思われる表現を用いるのに対し、フィリッピは「Fulfill your praises, Thus I speak.」で文章をしめ、ボックは「we humbly raise our praise」で終える。ここにも、主語・述語・過去・現在があいまいな日本語表現をどう解釈し、翻訳していくのかという問題が表出している。

これらの事例から、翻訳には日本語のあいまいさにどう対応すべきなのかという問題があることが判明し、これらの過去の『延喜式』祝詞の翻訳を比較検討することは、今後『延喜式』の翻訳を行う上での大きなヒントになろう。

3 『延喜式』の翻訳と宗教研究

これまで四つの『延喜式』の翻訳者とその翻訳を紹介してきた。そして『延喜式』の翻訳は基本的には祝詞に集中していることを示した。本節では、なぜこれまで祝詞の研究が中心となっていたのかについてふれることとしたい。

すでに指摘してきたようにサトウが『延喜式』の中の祝詞を研究した目的は、日本人理解のため、当時、日本の原始宗教であると考えられていた神道の研究が必要であるとサトウが判断したからである。サトウは、神道を日本人の原始宗教であるととらえた。そして、その神道について研究する

には二つの方法 (two principal avenues) があると言う (波線部)。その一つは、『日本書紀』や『古事記』をはじめ、古い伝承や神話について検討する方法である (下線部 (1))。もう一つは、神道の実践面の研究を行うことである (下線部 (2))。サトウにとって儀式の場で読み上げられる祝詞の研究をすることは神道研究の一方法であったのである。サトウのこの考え方は、“Ancient Japanese Rituals Part 1”, *Transaction of Asiatic Society of Japan*, 7, の序文に次のように見える。⁽²³⁾

In studying the primitive religion of the Japanese people there are two principal avenues open to us. We may examine the myths which are contained in Nihongi, Kozhiki and other early records of tradition, (1) and by analyzing the names of the gods and other supernatural beings who figure in those legends, discover the real relation in which they stand to each other and the true signification of the stories concerning them. In this way we should gain a general idea of the accepted belief concerning the gods, that was current at the time when those records were compiled, that is to say, if the expression be admissible, of the theory of Shintau, and at the same time it would become possible to show how and in what order these myths were evolved. But of not less importance than this inquiry would be an investigation into the practical side of Shintau, (2) by considering the attitude which the worshipper assumed towards the objects of worship, the means which he adopted of conciliating their favour or of averting their anger, and the language in which he addressed them. (中略)

An important part of every performance of Shintau rites, not less so than the presentation of offerings to the god or departed human spirit, is the reading or recitation of a sort of liturgy or ritual addressed for the most part to the object of worship, in which the grounds of this worship are stated and the offerings are enumerated. The Japanese word for such a liturgy or ritual is *norito*, frequently called *notto*.

引用部分の最後の点線部の内容を簡単にまとめると、サトウは、祝詞を神道儀礼の祈禱書のようなもの、もしくは口頭で表現された儀礼としてとらえていた。そのため、祝詞研究を盛んに行ったのである。

日本アジア協会の会合での議論の記録や明治初期に発表された論考に目を通していくと、サトウのみならず当時の欧米人が神道研究を行った背景として、次の三つがあげられるのではないかと思う。⁽²⁴⁾

一つ目は、日本の宗教政策、神道を日本を代表する宗教とする明治三年 (1870) の「大教宣布の詔」の影響について、外交問題として検討する必要性を感じていたであろう点である。幕末から明治初頭にかけて、大政奉還後の慶応四年 (1868) のいわゆる「神仏分離令」や先述の「大教宣布の詔」を発端に、廃仏毀釈の嵐が吹き荒れた。また、慶応三年 (1867) には浦上四番崩れが起き、アメリカやイギリスなどの外国からの度重なる抗議にもかかわらず、キリスト教の排除は明治政府下でも続いていた。やがて廃仏毀釈運動は鎮まり、明治六年 (1873) までにキリスト教禁止の高札が撤廃された。そのような動きの中で、日本政府が国家の宗教とする神道への関心が高まったと推測される。

残りの二つは、一つ目の点と関連している。二つ目は、仏教国でありながら廃仏毀釈が起きたり、伊勢詣をする日本人を理解したいという欲求、そして、三つ目は、明治国家が推し進める「国家神道」とは異なる、土着の信仰としての神道の解明をしたかったことである。

このような流れの中でサトウの『延喜式』祝詞の翻訳・註釈書は生まれ、その他にも、アストンの『日本書紀』の英訳、チェンバレンの『古事記』の英訳も生まれた。アストンはサトウのように外交官として活躍しながらも神道の研究書を出した。その『神道』の序文で、アストンは、

神道、すなわち日本の古いカミ崇拜は、世界の大宗教に比べて決定的に未発達であるのが特徴である。その多神論、最高神がないこと、偶像や道德律が相対的にないこと、霊の概念を人格化することが弱いこと、それを把握するのをためらっていること、来世の状態を実際に認識していないこと、深く熱烈な信仰が一般にないこと—これらすべてのことから、神道は文字による記録を充分もっている宗教の中では最も未発達なものとの烙印を押していいだろう。それにも拘らず、それは原始宗教ではない。それは組織された神官階級と念入りに作られた祭儀を持っている。神道が現在のような形になったとき日本人の一般的文明は原始の段階から遙かに進んでいた。彼らは既に農業国民だったが、その状態は神道に深い影響を及ぼした。彼らは安定した政府を持っていたし、醸造、製陶、造船、架橋、採鉱の技術を持っていた。われわれが原始的形態の宗教を見出せるのはこのような情況のもとではない。

と記している⁽²⁵⁾。アストンは、原始の段階から遙かに進んだ文明の中でも、未発達な面を残している「神道」という宗教の特徴を指摘している。

このように、明治時代には、日本の「神道」の研究が、外国人の中でもひろまっていた。ただし、現在は、神道研究は比較宗教学の中で研究が行われ、日本の宗教という観点からは仏教研究の方が進んでいるとの指摘もある⁽²⁶⁾。事実、祝詞の研究はボックのものを最後にみられない。そして、祝詞研究の衰退と共に『延喜式』は英語圏では忘れられた史料となってしまっているのが現状であろう。

おわりに —『延喜式』の国際発信の今後に向けて—

ここまで『延喜式』の欧米での研究状況を概観してきた。『延喜式』の研究は、明治のサトウより始まったが、当時の関心は史料としての『延喜式』には向いておらず、『延喜式』の中の祝詞のみが注目された。それはサトウら当時の欧米人が、日本人の宗教観、神道という宗教を理解したいという欲求がベースにあったからである。サトウに続き、フローレンツもサトウのスタイルを踏襲して『延喜祝詞式』の翻訳を行ったが、明治維新前後と比べれば落ち着いた日清戦争後の日本と欧米との関係性の中では、日本人や神道の理解という側面よりはフローレンツ自身の文学的関心による祝詞研究であったといえよう。その後のフィリッピとボックの『延喜式』祝詞研究も、各々の学問的探求心から行われた研究であった。しかし、共通しているのは祝詞を翻訳の題材としたことである。欧米圏とは異質な日本の神と人との交流のあり方を、そのアプローチの方法は異なっても模索したのがこれまでの欧米における『延喜式』研究であったといえよう。

「はじめに」でもふれたように、本共同研究「古代の百科全書『延喜式』の多分野協働研究」は、

古代史(文献史学)以外の様々な分野と協働して、『延喜式』の情報を広く活用できる体制を作り上げることを目的としている。神信仰に限らず、『延喜式』を古代の様々な事象を伝える歴史史料として、英訳し、国際発信していくことが求められている。

本共同研究における『延喜式』翻訳作業と、本稿で紹介してきたこれまでの『延喜式』翻訳作業との大きな違いであり、かつ本研究における翻訳作業の特色は、一人の孤独な作業ではなく、様々な分野・国籍の人間が情報交換をしながら共同で行う点にある。これまでの英語を母語とする者による翻訳は、個人の研究関心や生活環境によって、無意識のうちに制約を受けていた。また、どれほど先行研究を網羅的に調査し、研究を行ったとしても、どうしても一人の力では偏ってしまう点や及ばない点がでてくる。これまでにない共同研究の利点を生かした翻訳の作成が、本共同研究においては進められつつある。

加えて、本共同研究の画期的な点としてあげられるのは、この『延喜式』翻訳作業が、日本語を母語とする研究者からの発案で、段階的プロセスを踏みながら、集団で翻訳していくプロジェクトであることである。ブルース・バートン氏は、英語圏における日本古代史関連の著作が少ない理由をいくつかあげている。その中で、氏は「日本の歴史研究は、良い意味でも悪い意味でも、とても細かい。英語で出版される日本研究とは対称的に、テーマも、取り扱う時代も、地域的な幅も、非常に狭い部分を深く掘り下げたものが多い」と述べる⁽²⁷⁾。氏は、このような日本史研究を悪いと断罪してはではなく、筆者も同様に、日本で日本の研究をしている以上、この研究姿勢は当然のことと受けとめている。そして、何より本『延喜式』翻訳プロジェクトにおいては、現在の日本史研究のあり方が十分に活用でき、だからこそ海外に発信する意義があるものとなっている。各分野の専門家に翻訳作業に加わってもらうことにより、その研究分野の最新の研究成果が生かされ、それをどのように発信するのかを集団で検討することによって、大きな学問的効果が得られるのである。

段階的プロセスによる集団検討の翻訳作業には現代語訳の作成が不可欠である。本共同研究の現代語訳作業では『延喜式』の各条文が、古代史の専門家以外によって活用されることを念頭においている。だからといって、基礎となる『延喜式』の原文をおおざなりに扱っているわけではない。現代語訳の作成に当たっては、まず、当該条文の写本研究に基づいた本文校訂が行われており、その新たな校訂本文を元に現代語訳が作られている。この現代語訳の作成には、細分化しているといわれる日本古代史の研究者のうち、その分野の専門家、加えて、日本古代史以外の他分野の専門家も参加し、検討が重ねられている。翻訳にたずさわる筆者もその場に参加し、現代語訳作業での問題点を英訳担当者も共有するようにしている。

そして、ようやく翻訳の段階に入る。綿密に作成された現代語訳ではあるが、日本語と英語には言語の構造上の違いがある。つまり、日英の単語の対対応は基本的には無理であるため、各条文の現代語訳の全体像をとらえてから、翻訳作業に入っていく。翻訳するには、日本語では当たり前のこととして省略している主語・目的語等は適宜補わねばならない。単数なのか複数なのか、指示語は何を意味しているのかなど、日本語ではあまりにも当然だと思われ、等閑視されていることを厳密に検討する必要性にせまられることもある。そのときに個人では調査の限界があるが、各分野の専門家との集団検討によって、より緻密で曖昧さのない翻訳の作成が可能となる。そして、日本語ならではの表現や論理の曖昧さを取り除き、一つの訳語にたどりつくことは、古代史研究、歴

史学研究の発展に結びついている。

その代表的な例として、伊集院葉子、義江明子、PIGGOTT Joan による戸令や後宮職員令の英訳があげられる⁽²⁸⁾。伊集院氏は、令条文の英訳作業を通じ、律令女官の本質がより詳らかになると指摘する⁽²⁹⁾。これらの論考は、令の英訳に真っ正面から取り組んでいるため、『延喜式』を訳すにあたり、行政用語を訳す場合は必ず参照すべきものであると筆者は評価している。これ以前は、日本史用語については、MILLERの著作の用語集が使い勝手がよいとされていたようだが、現在の研究水準や、今の政治の場で使用されている用語とのニュアンスの違いがある場合もみられる。それに対し、伊集院葉子、義江明子、PIGGOTT Joan らは、ミラーの使用した用語など、これまでのものを見直し、異なる語を英訳に用いることもある⁽³¹⁾。これまでの英訳をどこまで踏襲していくか、変更することによって混乱は生じないのかといったことが懸念されるが、これは日本国内での日本史研究、そして、英語母語者による日本史研究がそれぞれ発展していったことに起因するものである。本共同研究での翻訳作業を通じ、よりふさわしい日英対訳語を集積していくことも、課せられた重大な課題である⁽³²⁾。

日本の歴史史料、特に古代史の史料の翻訳には、ブルース・バートン氏がすでに指摘したように言葉の壁の問題もあろう。氏は、「実際、日本人の古代史研究者の中に英語に堪能な者があまり多くない。また、研究者自身に代わってその著作を正確に英訳できる人が少ないのも事実である」と述べている⁽³³⁾。しかし、本共同研究では、そうした言葉の壁はさほどないことも大きな利点である。研究メンバーには英語を母語とする日本史研究者や、第二言語の英語を母語と等しく習得している日本史研究者も含まれている。また、将来的には日本人研究者による指導も含めた英語母語者との『延喜式』を介した学術交流が予定されている。翻訳には労力がかかるわりに評価されないというのが今までの考え方であったが、グローバルな学術交流の積み重ねによってそのような考えも変わってくる可能性がある。

日英両方の言語を扱うことのできる日本研究者によって、日本史史料用語・学術研究用語の日英対訳語の見直し作業は、他でも行われつつある。東京大学史料編纂所では2017年度より一般共同研究「日本史用語グロッサリーの蓄積と改良にむけて」を開始している⁽³⁴⁾。ここでは、特に古代・中世史を中心とした日本史研究の国際化に寄与するために、日本史用語の日英対訳語のグロッサリーの増補、より使いやすいシステムの構築を目標としている。東大史料編纂所が開発・運用している「応答型翻訳支援システム (On-line Glossary of Japanese Historical Terms)」の登録データを再点検し、より信頼性のある内容へ、そして、データ数の増加を行うために、英語母語者の代表を中心に、英語に堪能な日本語母語者、英語母語者の日本研究者が共同で史料翻訳を行っている。参加者による議論を経て一つの的確な対訳語に行き着くためには、高い日本史の研究水準と、同時にニュアンスの違いを理解した上での多くの英単語が要求され、多くの時間と労力がかかる。対訳語グロッサリーの充実は英語母語者の日本研究者の知識の共有基盤となるだけでなく、英語圏への発信が十分ではないと言われている日本人研究者が、国外にむけて研究成果を発信するためにも活用でき、ガラパゴス化しているとの指摘もある日本史研究の国際化には大きな役割を果たすはずである。

本共同研究「古代の百科全書『延喜式』の多分野協働研究」に英訳を中心にあずさわることによって、多分野の研究者との交流を通じ、筆者自身の専門分野(日本古代史)の研究が深化し、さらに、

グローバル化が進む中で日本史研究が取り残されずに、内外に貴重な研究成果が発信できるような一助ができれば幸いである。活動は始まったばかりであり、有効なツールやメソッドのご教示をお願いしたい。

註

(1)——『延喜式』の条文の翻訳は、ここにあげた四つ以外には、VERSCHUER Charlotte von *"Rice, Agriculture, and the Food Supply in Premodern Japan"*, translated and edited by Wendy Cobcroft, London, Needham Research Institute Monograph Series, London, New York, Routledge, 2016にある内膳司式の一部がある。

(2)——アーネスト・サトウ(坂田精一訳)『一外交官の見た明治維新』上・下巻, 岩波書店, 1960年。日本でサトウの活動に注目が集まるようになったのは、萩原延壽が英国国立公文書館に保管されていた『サトウ日記抄』を朝日新聞に連載し、サトウの幕末から明治初期までの活動を紹介したことにある。連載は、『遠い崖—アーネスト・サトウ日記抄』全14巻(朝日新聞社, 1980年, 1998~2001年)として出版されている。

(3)——2013年の文化庁による「日本語に対する在住外国人の意識に関する実態調査」によれば、「聞く力」「話す力」とともに、学習期間二年以上の人の半数近くが「よく分かる」と回答している。

http://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/nihongokyoiku_jittai/zaiju_gaikokujin.html (最終アクセス 2018年8月21日)

(4)——ウィリアム・ジョージ・アストン William George Aston (1841~1911)。イギリスの外交官であり、かつ日本学者で朝鮮語の研究者として活躍した。多くの功績があるが、ここでは特に日本アジア協会の一員として、1896年に『日本書紀』を英訳したこと、1899年に『日本文学史』を執筆したこと、1905年に日本の神道という信仰について分析した『神道』を執筆したことをあげたい。

(5)——バジル・ホール・チェンバレン Basil Hall Chamberlain (1850~1935)。イギリスの日本研究家。1873年にお雇い外国人として来日し、英語教師として活動する傍ら、俳句を初めて英訳したり、『古事記』を英訳したり、日本文学の海外への発信に寄与した。また、アイヌや琉球の研究も行った。

(6)——University of Southern California The Project for Premodern Japan Study (Joan Piggott 教授指導)の中の2012年の漢文ワークショップの成果。延喜太政官式の一~五条, 十条, 十一条の英訳。

https://static1.squarespace.comstatic/58124ac8579fb3f8ea46dc1b/t/587c79f21e5b6cf13b8f18a5/1484552690875/KW12_Engishiki_Daijokan.pdf (最終アクセス 2018年8月21日)

(7)——フィリッピは、その他にも、『古事記』やアイヌのユーカラの翻訳、三味線・琵琶の奏者としても有名であるが、本稿では、『延喜祝詞式』の翻訳にのみ着目していきたい。

(8)——存命であれば、百歳を越えている。

(9)——延喜神祇官式の翻訳は1970年と1972年に発表されているが、陰陽寮式と大学寮式の翻訳は1985年に発表されている。

(10)——SATOW, Earnest "Ancient Japanese Rituals Part 1", *Transaction of Asiatic Society of Japan*, 7, Yokohama, 1879, p109.

(11)——註(10)論文pp108-109.

(12)——SATOW, Earnest "Ancient Japanese Rituals Part 2", *Transaction of Asiatic Society of Japan*, 9, Yokohama, 1987, p418.

(13)——ここでいう本居宣長の説は、『大祓詞後釈』であろう。

(14)——本居宣長を尊重するサトウの姿勢は、薩摩藩を通じた、国学者とサトウとの関わりの中で生まれてきたものと指摘できるのではないかと、遠藤潤「アーネスト・サトウと国学」(『宗教研究』85-4, 2012年)にある。

(15)——単なる英訳の問題ではなく、サトウの寺社・神仏分離運動への認識と関わる問題であるのか検討の余地がある。引用箇所に見える「priest」も合わせて検討すべきであろう。

(16)——FLORENZ, Karl, "Ancient Japanese Rituals Part 4", *Transaction of Asiatic Society of Japan*, 27, Yokohama, 1900, p1.

(17)——註(16)論文pp2-3.

(18)——章立ての翻訳は、論考の内容に合わせて筆者が意識した部分がある。以下、同じ。

(19)——readableは直訳すると「読みやすい」だが、ここでは入手しやすいあるいはなじみ深いというニュアンスも含まれているように思われる。

(20)——類似の指摘が、BORGEN, Robert "Reviewed Work(s): Classical Learning and Taoist Practices in Early Japan, with a Translation of Books XVI and XX of the Engi-shiki. by Felicia G. Bock", *The Journal of Asian Studies*, Vol.45, No.3(May, 1986), pp. 587-588でもみられる。

(21)——University of California at Berkeley Japanese Historical Text Initiatives (<https://jhti.berkeley.edu/>)に、

重要な日本史料の英訳として、Bock 訳の『延喜神祇官式』がのる。(最終閲覧日は2019年1月20日)

(22)——HAVENS, Norman “Review of: Donald L. Philippi, Norito: A Translation of the Ancient Japanese Ritual Prayers”, *Japanese Journal of Religious Studies*, 19–4, Nagoya, 1992.

(23)——註(10) 論文 pp96–97.

(24)——日本アジア協会の会報『*The Transactions of the Asiatic Society of Japan*』7, 1879(日本語タイトルは『日本アジア協会会報』7号)の巻末には、発表当日の質疑応答(簡単な議事録)が残されている。明治初期の同会報の目次の通覧や、特に、アストン『神道』(注18)の序文を読んだ結果、受けた筆者の印象である。また、山口輝臣「第二部 宗教と向き合って—十九・二十世紀(小倉慈司, 山口輝臣『天皇の歴史9 天皇と宗教』講談社学術文庫, 2018年, 2011年初出)も参考とした。

(25)——アストン・ウィリアム・ジョージ(安田一郎訳)『神道』, 青土社, 1991年

(26)——大東敬明「米国における神道研究についての雑感」『明治神宮国際神道文化研究所 神園』13, 2015年。

(27)——バートン・ブルース「英語圏における日本古代史及び関連分野の出版事情—日本人研究者への海外発信の呼びかけ—」『国際学術研究会『交響する古代VI』報告要旨集 古代文化資源の国際化とその意義』, 明治大学, 2016年。引用箇所は原文の通りである。

(28)——伊集院葉子, 義江明子, PIGGOTT Joan 「日本令にみるジェンダー(その1)戸令」『*帝京史学*』28, 2013年

「日本令にみるジェンダー(その2)後宮職員令(上)」『*専修史学*』55, 2013年

「日本令にみるジェンダー(その3)後宮職員令(下)」『*専修史学*』57, 2014年

「日本令にみるジェンダー戸令・後宮職員令

Comprehensive Glossary」『*専修史学*』59, 2015年

(29)——伊集院葉子「日本令英訳の試み」『国際学術研究会『交響する古代VI』報告要旨集 古代文化資源の国際化とその意義』, 明治大学, 2016年

(30)——MILLER, Richard *Ancient Japanese nobility: the Kabane ranking system*, Berkeley, University of California Press, 1974.や, MILLER, Richard *Japan's First Bureaucracy: A Study of Eighth-Century Government*, New York, Cornell University East Asia Papers, 19, 1978の巻末には用語集がある。一例として, 太政官をMillerはState Councilと訳すが, 伊集院葉子・義江明子・PIGGOTT JoanはCouncil of Stateを用いる。一般的な和英辞典では, The Grand(Great)Council of StateやThe Department of State, Cabinetなどがあげられる。なお, Cabinetは古代の太政官組織を示すには適切とは言いがたく, むしろ現在の内閣を意味するのに適している。

(31)——例えば, 後宮をHinder Palaceではなく, Back Palaceという新しい訳を提唱する。

(32)——筆者は, 2006年に国立歴史民俗博物館企画展示「日本の神々と祭り」の図録の英文要旨作成にかかわっているが, この時に, 國學院大學オンライン辞書のEncyclopedia of Shintoでは, 神輿をportable shrineと訳すが, 移動できる神社という訳は, 神輿を正確に表現できていないとの意見が民俗学や建築学の研究者から指摘があった。全ての専門家にとって納得のできる英訳を作ることの難しさはあるが, よりの確な対訳語作成は異分野の研究者の参加によって可能となることであり, 集団で翻訳を検討することの意義を経験している。

(33)——前掲註(27)。

(34)——研究代表者は, 南カリフォルニア大学教授Joan PIGGOTT氏。筆者も共同研究者として参加している。

参考文献

英語文献 in alphabetical order

- BOCK, Felicia "Englishiki: Procedures of the Engi era. Books I–V", *Monumenta Nipponica Monograph Series*, Tokyo, Sophia University, 1970.
- BOCK, Felicia "Englishiki: Procedures of the Engi era. Books VI–X", *Monumenta Nipponica Monograph Series*, Tokyo, Sophia University, 1972.
- BOCK, Felicia *Classical Learning and Taoist Practices in Early Japan, With a Translation of Books XVI and XX of the Engi–Shiki*, Arizona, Arizona State University Center for Asian Studies, 1985.
- BORGEN, Robert "Reviewed Work(s): Classical Learning and Taoist Practices in Early Japan, with a Translation of Books XVI and XX of the Engi–shiki. by Felicia G. Bock", *The Journal of Asian Studies*, Vol. 45, No. 3, 1986.
- FLORENZ, Karl "Ancient Japanese Rituals Part 4", *Transaction of Asiatic Society of Japan*, 27, Yokohama, 1900 pp1–112.

-
- HAVENS, Norman "Review of : Donald L. Philippi, *Norito: A Translation of the Ancient Japanese Ritual Prayers*", *Japanese Journal of Religious Studies*, 19-4, Nagoya, 1992.
- MILLER, Richard *Ancient Japanese nobility: the Kabane ranking system*, Berkeley, University of California Press, 1974.
- MILLER, Richard *Japan's First Bureaucracy: A Study of Eighth-Century Government*, New York, Cornell University East Asia Papers, 19, 1978.
- OOMS, Herman "Translating the Corpus of Ancient Japanese Law", *Monumenta Nipponica*, 68-1, Tokyo, 2008
- ※ *Der Yōrō-Kodex. Die Gebote. Einleitung und Übersetzung des Ryō no gige. Buch 1.*
By Hans A. Dettmer. Wiesbaden: Harrassowitz Verlag, 2009. 571 pages.
- Der Yōrō-Kodex. Die Gebote. Einleitung und Übersetzung des Ryō no gige. Bücher 2-10.*
By Hans A. Dettmer. Wiesbaden: Harrassowitz Verlag, 2010. 679 pages.
- Der Yōrō-Kodex. Die Verbote. Übersetzung des Yōrō-ritsu.*
By Hans A. Dettmer. Wiesbaden: Harrassowitz Verlag, 2012. 195 pages.
- Recueil de décrets de trois ères méthodiquement classés, livres 1 à 7: Traduction commentée du Ruijū sandai kyaku.*
By Francine Héral. Geneva: Librairie Droz, 2011. 779 pages.
- Recueil de décrets de trois ères méthodiquement classés, livres 8 à 20: Traduction commentée du Ruijū sandai kyaku.*
By Francine Héral. Geneva: Librairie Droz, 2008. 811 pages.
- 以上の五つの論考の書評。
- PHILIPPI, Donald *Norito: A New Translation of the Ancient Japanese Ritual Prayers*, Tokyo, The Institute for Japanese Culture and Classics Kokugakuin University, 1959.
- SATOW, Ernest "Ancient Japanese Rituals Part 1", *Transaction of Asiatic Society of Japan*, 7, Yokohama, 1879 pp95-126.
- SATOW, Ernest "Ancient Japanese Rituals Part 2", *Transaction of Asiatic Society of Japan*, 7, Yokohama, 1879 pp393-434.
- SATOW, Ernest "Ancient Japanese Rituals Part 3", *Transaction of Asiatic Society of Japan*, 9, Yokohama, 1881 pp188-212.
- SOWINSKA, Renata, "Regulations concerning kegare 穢 (impurity) in Englishiki 延喜式 and Hossoshiyosho 法曹至要抄", *Transactions of the International Conference of Eastern Studies*, 33, Tokyo, 1989 p135.
- VERSCHUER Charlotte von "Rice, Agriculture, and the Food Supply in Premodern Japan", translated and edited by Wendy Cobcroft, London, Needham Research Institute Monograph Series, London, New York, Routledge, 2016

日英文献

伊集院葉子, 義江明子, PIGGOTT Joan

「日本令にみるジェンダー(その1) 戸令」『帝京史学』28, 2013年

「日本令にみるジェンダー(その2) 後宮職員令(上)」『専修史学』55, 2013年

「日本令にみるジェンダー(その3) 後宮職員令(下)」『専修史学』57, 2014年

「日本令にみるジェンダー-戸令・後宮職員令 Comprehensive Glossary」『専修史学』59, 2015年

岡野 眞(山口えり訳) *The Spatial System in Japan*, Takamatsu, Bikohsha, 2012年

日本語タイトル: 『神社の参道空間』

日本語文献

アストン・ウィリアム・ジョージ(安田一郎訳) 『神道』, 青土社, 1991年

伊集院葉子 「日本令英訳の試み」『国際学術研究会『交響する古代VI』報告要旨集 古代文化資源の国際化とその意義』, 明治大学, 2016年

ヴェアシュア・シャルロッテ・フォン(河内春人訳) 『モノが語る 日本対外交易史 7-16世紀』藤原書店, 2011年

遠藤 潤 「アーネスト・サトウと国学」『宗教研究』85-4, 2012年

楠家重敏 『アーネスト・サトウの読書ノート』雄松堂出版, 2009年

小山 騰 『ケンブリッジ大学図書館と近代日本研究の歩み』勉誠出版, 2017年

-
- 佐々木憲一 「日本古代学の国際化のために—ジョン=ピジョン編集 Capital and Countryside in Japan, 300-1180 の刊行に寄せて」『史林』98-8, 2008年
- 大東敬明 「米国における神道研究についての雑感」『明治神宮国際神道文化研究所 神園』13, 2015年
- サトウ・アーネスト(坂田精一訳) 『一外交官の見た明治維新』上・下巻, 岩波書店, 1960年
- サトウ・アーネスト(床田元男編訳) 『神道論』平凡社, 2006年
- 滝川政次郎 「近刊紹介 英訳『延喜式』ボック氏訳」『國學院雑誌』73-9, 1972年
- 次田 潤 『新版祝詞新講』戎光祥出版, 2008年
- 虎尾俊哉 「延喜式の翻訳をめぐる」『神田外語大学 日本研究所通信』2巻1号, 1993年
- 虎尾俊哉 「アーネスト・サトウの延喜式祝詞研究」『神田外語大学日本研究所紀要』1号, 1993年
- 虎尾俊哉 「延喜式の翻訳をめぐる(補遺)」『神田外語大学日本研究所通信』2巻2号, 1994年
- 虎尾俊哉編 『訳注 日本史料 延喜式 上巻』集英社, 2000年
- 萩原延壽 『遠い崖—アーネスト・サトウ日記抄』全14巻(朝日新聞社, 1980年, 1998~2001年)
- バートン・ブルース 「英語圏における日本古代史及び関連分野の出版事情—日本人研究者への海外発信の呼びかけ—」『国際学術研究会『交響する古代VI』報告要旨集 古代文化資源の国際化とその意義』, 明治大学, 2016年
- フラッヘ・ウルズラ 「ドイツ語圏の日本学における神社に関する研究」『国立歴史民俗博物館研究報告』148集, 2008年
- ブリン・ジョン 「世界のなかの神道研究」『鴨東通信』102号, 2016年
- 三橋 健 『神社の由来がわかる小辞典』PHP研究所, 2007年
- 三宅和朗 「Ⅱ 古代祝詞の諸相」『古代国家の神祇と祭祀』吉川弘文館, 1995年
- ランベッリ・ファビオ 「浮遊する記号としての「伊勢」」『変容する聖地 伊勢』思文閣出版, 2016年
- 山口えり 「広瀬大忌祭と龍田風神祭の成立に関する一試案: 祝詞の検討を中心として」『史観』158, 2008年
- 義江明子 「日本古代史の精緻化と史料英訳: 日本史を日本人研究者だけのものとしないうために」『史学雑誌』124-11, 2015年

(広島市立大学国際学部, 国立歴史民俗博物館共同研究員)
(2018年9月18日受付, 2019年3月28日審査終了)